
ヒナゲシの華

水無月奎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒナゲシの華

【Nコード】

N5189Z

【作者名】

水無月奎

【あらすじ】

ヒナゲシさんには同い年の従姉妹がいます。似通った名前のヒナコちゃん。しかし似て非なるもので、顔が違う、スタイルも違う、性格も違っていて、まさに我が人生は比較に始まり比較に終わる。いや、仕方ないんですけどね、現実はいつだってシビアで物語のような甘い展開はありえなくてーあれ、目から汗が。減った、今確実に心の中の何かが減った。そんなヒナゲシの十三からの人生です。あまじょっぱいよ！

五話で異世界トリップしました。格差人生に慣れた主人公が泣きま
した。

似て非なるヒナ（前書き）

さてさて、物語の始まり始まり。

似て非なるヒナ

悲劇は、外から見ると喜劇に見えることがある。

対岸の火事であれば、何事もなく平和に滞りなく進むストーリーより、キャストが四苦八苦していることこそが面白い。

その苦悩する様が、涙する顔が、激昂するのが嬉しいのだと。

他人とは得てしてそんなものなのだ。

などと悟りきつた冒頭を語る私、名をヒナゲシという。漢字は雛唄粟なのだが、素直にこれが書けるだろうか。いや、書けまい。

というわけで、だーれも漢字を思い浮かべて私の名を呼ばないため、ヒナゲシなのだ。

そんなヒナゲシさんが、何人生悟りきつちやった枯れた台詞呟いてんの、ってな話だが、今現在悲劇真っ只中だからである。他人には面白くて仕方ない類いの。

ヒナゲシは農耕して生計を立てているちっちゃな村の小娘なのだが、まるつきり同じ年の従姉妹がいる。名をヒナコ。

この村で年齢がびつたり同じなのは二人だけ。2〜3離れた上と下の娘さんもいるが、十三なのは二人だけ。

親も姉妹とくるから、何かと比較されて生きている。

その比較こそが悲劇。他人から見れば喜劇。ちくしょう、運命を呪いたい。

ヒナコとヒナゲシ、という響きは似ているのだが、顔面とスタイルと漢字まで『似て非なるもの』、という言葉がピッタリと当てはまる。上に見られる側はいい。〜より可愛いね、〜より似合うね、〜より好きだなあって褒められフィーバーだ。

が、下に見られる方からしてみたら。くより可愛くない、くと同じように出来ないの？、くだったら良かったのに、と。まるで存在するのが悪かのように言われまくる人生をひっ被らされるのだ。詰んでる。人生詰んでるよね。この先の人生全て見えた気分だ。

これが母の語る物語ならば、こんな器量悪しの娘にも一途に想ってくれる男というものが存在するわけだが。

人生、そんなに都合良くはいかない。現実はいつだってシビアだ。初恋以降全ての恋心を踏みにじられ続けた私は、既に悟りきっている。まともな恋愛はもう諦めよう、と。

きつといつかあぶれた男性と見合い婚だ。それも嫌がられるなら、一生独り。あつ、泣いてないから。これ、ただの汗だから。

大人たちの心ない言葉はもうグツサグサとヒナゲシの心を突き刺している。その上で成り立った性格だ。もう清い心のあの頃には戻れない。人生、諦めが肝心である。

どんな台詞にもめげない鉄の心。傷ついた表情など、周りを喜ばせるだけ。そういうわけで、今のヒナゲシは完成している。親も遠い目をする、時々。

「ヒナちゃん！」

いかにも女の子らしい、甲高い声が響く。村を見下ろせる位置で突っ立っていた私は、顔を上げた。

「ヒナコ」

無垢な笑顔全開で走り寄ってきたのは、話題のヒナコさんだった。遠目から見ても可愛い。軽く死にたくなかった。

「もう、ヒナちゃんつたら！すぐに居なくなるの良くないよ！」

いや、お前こそ何故にすぐ真横に並びたがるのか。おかげさんで比較しやすく、ますます私は悪し様に言われるのである。
そんな事よりも。

ヒナコの背後に目を移し、うんざりとした。また増えている。

「後ろの男ども、また増えてんじゃん。何で連れてくるかな…」

十三ではあるが、十分女の子らしい可愛さがあるヒナコは、村中の男をもれなく骨抜きにした。その射程範囲は十代に留まらず、二十代三十代にも及ぶ。ロリコン野郎が多過ぎて死にたくなる。

逆ハーレムというものらしい。縁のない言葉だったが、ヒナコが身近にいることで、嫌でも野郎どもの醜い争いを間近で見続けるはめになった。

「それにヒナって呼ぶのやめて。それ、あんたのことだから。むしろ村中の共通認識だから」

それをあえて私に使うのだから、嫌がらせなのかと言いたくなる。あっちのヒナちゃんは可愛いけど、こっちのヒナちゃんは、ねえ…？なんて大人たちに言われてみやがれ。確実に何かが減るぞ。

「いいじゃない、ヒナちゃんと私しか、ヒナっていいんだよ」

うん、貴様が考えなしなのはわかった。ありがとう、君の無邪気ですり一層傷つけられてます私。

背後に並ぶロリコンどものうっとり顔も吐き気に繋がる。私の体調不良は貴様らのせいだ。死ねよほんと。

「ねえヒナちゃん、今度の収穫祭で歌と踊りを披露するの」

「ぜってえー嫌だ」

「まだ言い切つてないのに」

何が言いたいのかは瞬時に把握した。

この幼馴染は、本気で理解してないのかと突き詰めたくなるほど、私を同じ舞台に立たそうとする。それがどんな悲劇を引き起こすか知らないで。

歌と踊り？こいつと一緒にやってみやがれ。ますます格差社会が生まれるじゃないの。主に私とヒナコの間。

何でお前いんの？と怪訝な視線を集める晴れの舞台での羞恥プレイは一度で十分だ。そこに思い至らなかつた過去の自分も抹殺してしまいたい。

ヒナコとヒナゲシさん。二人一緒に赴けば、お呼びでないと言いたげな怪訝な顔をされる辛さがご理解いただけるだろうか。

何でここに居るの？何で？

これほど人を傷つける視線があるだろうか。奴らは覚えてなかつたが、私は過去の一つ一つ覚えている。簡単に許せるわけがない。とどのつまりは孤立してることなんだけど。死にたいです。

「ヒナコが一人で歌って踊ればいい。どうせみんなが見たいのはヒナコ一人なんだから」

さあ、と気持ちの良い風が吹き、目を細める。ここで居眠りしたらさぞかし気持ちが良いだろうが、そろそろ夕飯の支度がある。

「じゃーね」

求められるヒナコと求められないヒナゲシ。

求められない存在は、どこへ行けば良いのでしょうか？

ロリコンと面友ナ（前書き）

トラウマは一つに非ず。

ロリコンと両ヒナ

「ロリコンが多くて死にたくなる」

初めてこの言葉を口にしたのはいつの頃だったか。

私自身のことではない。何故なら私の横には大抵ヒナコという光り輝く可愛子ちゃんがいて、存在そのものを霞ませられてきたからだろうん、泣いてないったら。

自我が芽生える前から、衆目は私でなく私の横に何故かいるヒナコに注目していた。自覚した後は絶望という名の暗闇へおむすびころりんだったが、性別オスの眼差しは総毛立つほど気色が悪かった。

「ーなんでアンタは平気なんだ。」

常に情欲にまみれて見つめられているはずのヒナコが反応せず、向けられてはいない眼差しに私がびびっている。まるで自意識過剰で男を見ているようで、私のテンションだだ下がります。

私の存在に気づかず、男どもが話していることがあった。

「あああー…ヒナコたんては体そのものが甘い饅頭みてえええ。萌ゆる」

「すっべすべの白い背中や太ももがな！汚れのないおれの天使たん…いやもうおれの嫁！」

「断固阻止。ヒナコたんはもれの嫁。清いムスメでありすべてを包み込む母であり淫らなこいびちよ」

ぞわわわわわ。

頭が太もも辺りにきてしまう大の大人たちが、ハアハアと息も荒くマシンガントークを繰り返していった。

気づけよ。てめえらの足もとにいるいたいけな子供によおおおおう！

貧血状態に陥った私は、吐いた。大きな栗の木の下で。

村に住む大人たちが、一事が万事、こんな調子だったもので、うっかり好意を寄せた人物の本性を知るたび吐いた。

ダメだ。何かもうこの村超ダメだ。

まともな大人がいない。つーか妻帯者もこんな調子。まともな発言してる野郎も裏ではハアハア逝ってた。

怖い。怖い怖い怖い。普通な大人って実はいないんじゃない？

この世の人間すべて、ヒナコを認め求める人間しかいなくて、ヒナゲシを求めてくれる人はいないんじゃない？

げろげろと胃の内容物ぜんぶ吐き出した後に、残ったのは厳然とした事実。私にはありがたくない現実。

まだ子供と言って相違ないヒナコ。この先成長すればどんなことになるんだろうか。そしてその時も私は彼女の横に並んでいるのだろうか。同じ名前なのにね、と言われながら。何の罰ゲーム？

ヒナちゃん。ヒナちゃん。

最近では幻聴に怯えるようになった。

近くにいない筈の音が聞こえるんですが、これはあれでしょうか、心の風邪とか何とかというアレ？戦士とも勇者とも呼ばれる企業戦士たちが人間関係に悩みながらレベルアップして得る職業病？あれ、私思ったより追い詰められてる???まだ十三なんだけど。

最近では逆ハーレムも大規模になってきた。つまりいつでもハフハフしてるオスどもを引き連れて参上する。私の胃がねじ切れる日も近い。

「ロリコンが多くて死にたくなる」

ぼつりと零した本音は切実だ。

頼む、少女ボディに「ッアー！」しない大人がいる世界に私を連れて行って。

リアルはきついろ byヒナゲシ(前書き)

二人並んでても空気。エア存在。

リアルはきついよ byヒナゲシ

春の妖精さんともてはやされている。

夏になれば大空を舞う小鳥さん、秋になるとたわわに実る木の実、冬になれば誰にも心を溶かせない冬の女王の寵児と呼ばれる。一年通して人外かよ。

もち、私のことではない。

隣にいるヒナコちゃんことである。

私自身は怒涛のごとく浴びせかけられる褒め言葉の流れ弾を受け、魂が口から飛び出ている。

ー無理。自分が褒められるならまだしも、私なんか全く見えてない人たちの言葉は凶器だ。

しかも妖精とか天使とか。人間やめさせてどうするつもりだ。そしてこんな言葉の暴力に何故にお前はご満悦なんだ。

懲りずに人外の隣に立つお前はバカかと思われた皆さま。150cmちよいしくない私たちを取り囲むこの壁が見えてますか？私の頭の上に胸部がありますよね？そんな彼らが円陣を組んでますよね？ね？

もちろん注目は隣のヒナコちゃんだ。収穫祭のためにと彼女の母が精魂込めて縫い上げた一張羅を着て、貢ぐことに余念のない男たちの怨念のこもったアクセサリーを散りばめた彼女しか見ていない。それ以外に見るものなんぞない。ここには。アタシトカナー！

だが。私は彼女と従姉妹なのだよ。同い年のオンナノコなのだよ。

片一方だけが着飾ってるわけがないんだよね。親が姉妹ですしね。たとえ片一方の母親があんまり裁縫得意じゃなくて、娘を飾り付けるプラスチックなアクセサリーを忘れててもね。同じ意味で着飾ってるんだから、並べられる。当然のように。

「ハアハア。萌ゆる。ちょー萌ゆる。何あのスカート丈。何この襟ぐり。ちょ、おま。髪をかき上げるたび薫るフローラル。買う。絶対同じシャンプー買う。そんで同棲ごっこしちゃう。むほっ！」

初恋のお兄ちゃんが何か言ってる。

うん、意味なんか考えちゃイケない。今にも逝きそうな男がここに居るからな。ここで倒れてこいつらに触られるなんて願い下げだ！

顔面蒼白で今にもリバーズしそうに汗かいてる私なぞ、誰一人として気づいちゃいない。か、悲しくなんてないんだからっ！

「ヒナちゃん、みんな喜んでくれて良かったね！今年も二人で歌おうね！」

『え……』

聴こえない筈の音が空気を伝って私の耳に飛び込んできた。

え、なに、お前も歌うの？一緒に？天使の歌声に雑音混ぜてどうすんだよ。

という、何とも痛い本音が。KYヒナコ、デスノート決定。

「ヒナコ、みんなアンタの歌声が聴きたいみたいだよ。一曲歌ってやったら？」

そして死ぬ。あっ、違った、ここから出せ。

「ええー…ヒナちゃんの歌声とっても可愛いのに」

むくれたヒナコは妖精だろうか天使だろうか？もういつそ女王様でいいんじゃない？誰もが君に傳く。

「私は老害、アツイイマチガエタ、村長んとこ行って来るから。ヒナコは歌ってて」

永遠に。そして私に二度と話しかけんな。

速やかにその場から姿を消すという悲しいスキルだけは得ていたので、いつもより華やかになったヒナコに群がる男の群れから抜け出せた。

振り返る。うん、誰も追って来てない。当然なんだけど、悲しいね！空気ダネー！

収穫祭用の一張羅。が、見てもらえなければ無用の長物。虚しいけれど事実です。

自宅でパパツと着替えよう、そうしよう。そんで賑やかましい村の様子とは一線を画して自分の世界にこもろう。うん、私の正義は二次元の中。いいよな、ご都合主義。イコール、ヒナコ不在！

何気にオタクをカミングアウトしてしまいました。すみません、腐女子です。現実に耐えられなくて厚みのほとんどない彼らがマイダリンです。

ノマカプとかやおいとかが百合百合とか普通に口から出ます。いいよな、二次元…。

収穫祭に家に閉じこもるバカがどこにいる、ここにいる、ヒヤツハ
ー！てなわけで誰も見やしねえ一張羅を脱ぎ捨てる。代わりに着替
えるのはゆるゆるになった襟元かつ洗いすぎてめつきり生地が薄く
なった古着だが、どんな辛い乙女ゲーも脱出できないRPGも乗り
越えた戦友でもある。不満などあるうか。

「さてっ、ヒナコのいない世界に逝くか！」

この日にこそ相応しいと取り置いていた物語がある。自分を投影で
きる女の子が、平々凡々な日常から飛び出して、いきなり異世界に
トリップしちゃうアレである。何でも鉄板と言われるほど萌える展
開みれらしい。

リアルじゃない友達から聞いた話だと、あなたは勇者だ！と選ばれ
た者として王族や神様にチャホヤされる展開だとか。何それ、うら
やましすぎる。私なんて生まれてこの方厚遇された記憶がない。死
ねヒナコ。

要約すれば召還された世界で、王子やら王様やら宰相やら神官やら
冒険者やら魔法使いと恋愛したり憎まれたりそれはそれは色々多種
多様な人間関係に恵まれるとか。な、何それ、私これまでスルーさ
れてばかりで自分の名前呼ばれることすら碌になかったよ！さすが
物語、ヒロインに優しい。

そうか…私でも友達を作れたり恋人を作れたりするのか。
涙がこみ上げてきた。他にも色々こみ上げてくるものがある。どん
だけヒナコの陰に隠れた人生だったかが染みた。ちよー染みた。

「えーっと、食料に飲料水に書くもの？」

非リアル友達様のメッセを読み上げながら、部屋にこもる下準備を

この世界はフィクションです。(前書き)

到着。けれど肉椅子に。

この世界はフィクションです。

完全に不意打ちであった。

一から丁寧に教えてくれる非リアル友人様に尻尾を振りすぎてしまつたらしい。

異世界に飛び立っているのか、束の間の暗闇の中で、めまぐるしくヒナゲシは考えていた。

信じすぎてバカを見たのは一度ではない。けど外なら、村以外の人ならあるいはと考えていた。

ーバカ過ぎる、ヒナゲシ。この世は私の為にあるのではないと知っていた筈なのに。

違う世界に向かいながら、強く強く自分を戒め直し、そうしてヒナゲシは扉を潜った。

ひゅぽんっ。

と何だかとても気の抜ける音がして、体に衝撃が走る。言うならば不安定だった態勢がようやく安定した、みたいなの。

そつつと片目を開け、異世界とやらを観察する。

目の前にオッサンがいた。

「あれ？」

てつきり厳かなる神殿とやらで、大勢の前で召喚されているものと思っていた私は、目の前でウィングラス片手にポカンとしているオッサンに、ポカン返しをした。

胸元をくつろげたシャツに、ワイングラス。何だかとてもリラックスタイムだ。

「えっ？」

ガン見されているので居心地が悪く、身じろぎしたらビクリと椅子が揺れた。

「ー待て待て待て。」

椅子って揺れる？しかもビクツと生きてるみたいに。

そろそろと首を動かし、背後を見上げ「ーっぎゃあああああ！」

人間椅子。

私はどうやら人さまのお膝の上に乗っかっていたらしい。それも綺麗な綺麗な銀髪のオニーサンに。

「……………」
「……………」
「……………」

お願い、誰か何か言って。

その足から降りるとか降りるとか降りるとか。

驚愕に目を見開く私とオツサンと銀髪美形。

時が止まった。

かといって良い歳をしているお兄さんに、いつまでも乗っかっていて良いものだろうか？いや、良い筈がない。

そうっつと尻をズラす。
そうっつと、そうっつと。

そうして体が落ちると思われた瞬間、ホールドされた。

「っ危ない！」

「わああっ」

どうやら私が自覚なしにその身が落ちると思われたらしい。長い腕が、ボディに絡まる。

更に、沈黙。

オッサンはやっぱりワイングラスを持っていて、私は囚われていて、人間椅子は私を戒めたままで。

何これ、どんな展開？私勇者設定じゃないの??

混乱も極み。

私は泣いた。

その涙、プライスレス（前書き）

泣きなさい、笑いなさい。

その涙、プライスレス

だばだーっと涙を流す私に、ポカンとこちらを見ていたオッサンが慌てたように誰かの名を叫ぶ。

「り、リーゼシアっ！」

上擦った声にすぐさま部屋の扉が開いた。意匠の凝ったそれは両開きになっていて、一人の女性が足早に近づいてくる。

目が素早く金髪のオッサン、今は肉椅子となっている銀髪美形、そして壊れた蛇口化したヒナゲシを確認する。私を見た瞬間、驚いたように目が瞪られたが、それも歪んだ視界の向こうでのことだ。詳細は知らない。

「な、何だ？どこか痛いのか？腹が減ったか？これはー酒だからダメか、ええと、水？ミルク？リーゼシア、子供は何を飲む？」

「すまない、座り心地が悪いのだろうか？俺も椅子になった経験は浅くてー待て、出来るだけ椅子になりきる、だから泣き止んでくれ」

ポトポトと涙を垂れ流す私に、立派な大人二人が狼狽している。それを見て取り、ヒナゲシは泣きながら呆気に取られている。

だって、泣いているのはヒナコでなく、私なのだ。

二人が泣いていれば大人たちはヒナコを取り囲み、気がつけば輪の中から弾き飛ばされていた。

悲しいが事実であり、ヒナゲシの歴史そのまんまである。

もはや何で泣いてるのかもわからなくなった頃、ヒナゲシはかつてないほどの高待遇を受けていた。

オッサンが呼びつけたリーゼシアという女性に優しく宥められ、涙を拭われる。オッサンが机に並べられた飲み物の説明をしながら、どれが飲みたい？どれでも選べと選択肢を委ねてくれる。銀髪美形はヒナゲシを己の膝から転がり落とすこともなく、尻が安定するよう横抱きに乗せてくれた。いや別に肉椅子じゃなければどうしても嫌！ってわけじゃないんですけど。私そこまで図々しくはないんですけど。

何これ、何なの？これが勇者特典ってやつ？？

小さな村で生きてきて、ここまで自分に關心を示されたことはない。あまつさえ、自分の涙の理由と精神状態を心配されるなんて。

異世界トリップ凄過ぎる！！

流れていた涙は途中から感涙になった。心中では「ありがとうございます、ありがとうございます！」と選挙演説者のように感謝を叫んでいる。口からも出したが、何が何だかわからなくなったようで、大人たちはただ優しく頭や肩や背中を撫でてくれていた。

目が、優しい。手のひらが、温かい。

何より、その意識はヒナゲシに向けられていた。

う、あ、うお、うおおおおん！！！！！！

昨夜は妙齡の女性と寝ました。(前書き)

人と目が合う。嬉しい。

昨夜は妙齡の女性と寝ました。

十三にして泣き喚くとか超恥ずかしい。

けれど生まれて初めて『ヒナゲシ』を見てくれたのが嬉しくて、それどころか私の涙で感情を揺らせてくれるなんて天使としか思えなくて、理性がハジけ飛んだ。

おいおいと泣いた私は気がつけば銀髪美形にお姫様抱っこされてベツドインさせられていた。もちろん銀髪美形ではなく、リーゼシアさんという女性のものだったのだが。

グスグス涙の止まらないヒナゲシを優しく抱きしめ、一緒に眠りについてくれた。

泣きすぎて前後不覚に陥るように意識を落とし、目覚めるとお湯で絞った布で顔を丁寧に拭ってくれる。

羞恥心で死にたくなっているヒナゲシに無体を強いることも一切なく、優しく手を引かれて食卓に連れて行かれた。何故か昨日会ったオッサンと肉椅子が居たが。

そして、ハイ、今ここね。

今現在、何故か銀髪美形のお膝に乗って朝ごはんを食べております…よ…。

いたたまれない、と顔面に貼りつけて懸命に逃れようとしているのだが、昨日目の前で幼子のように泣き叫んだことが念頭にあるのか、まるであやすように朝食を食べさせようとするのだ。オッサンと一緒に緒になつて。

「まずはスープで喉を潤してからパンを食べるか？それとも先に飲

み物を口にするか。何がいい？昨日はミルクを飲んで飲んでいたな。果実を絞ったものも幾つか用意させたぞ」

テーブルに並ぶ食器は多い。一斤どころじゃないパンが複数種と、スープの入った皿の下にまた皿が敷いてあるし、サラダにつけるらしきドレッシングも複数あるようだ。

卵の下にある肉はベーコンやハムより厚みがあつて、何かわからない。そこは異世界らしさだろうか。

物珍しさからじつと食卓を眺めてしまつたが、お腹が空いているとでも思われたか。

オッサンが自分の好みか子供向けか不明のジャムを伸ばしてパンを寄越した。銀髪美形に。

ーおい…。

勇者特典なのか、また泣かれてはたまらないと思われてるのか、実際年齢より低く見積もられているのか、ヒナゲシに羞恥プレイを要求する。

一晩一緒に過ごしてしまつたりゼシアさんはニコニコと見守っている。助けは期待できない。

基本、ヒナコが傍らにいたことで、注目を浴びない生活を送り続けていたヒナゲシには刺激が強い。

どうして自分は男性のお膝で食事をしているのか。いちいち食べるものをリザーブされているのか。口元が汚れるとすかさず拭われるのか。さっぱわからん。

私は幼児ではないのだから。

困惑顔で銀髪美形を見上げると、前髪を撫でられた。違う！

ねえリーゼシアさん、と救いを求める目で見つめると、おかわりですねとミルクを注がれた。違う！

ちよっとオツサン、と金髪に呼びかけると「何で自分だけ」といじけられた。ついうっかり！

口が締めれば喉をくすぐるように撫でてくる。ペットか！

大事に大事にされることに慣れなくて、子供みたいにお世話されるのが恥ずかしくて、ヒナコではなくヒナゲシを見てくれるのが嬉しくて、やっぱり涙目になるのであった。まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5189z/>

ヒナゲシの華

2011年12月20日01時55分発行